

別

編

庶民のくらしと文化



くらしの歴史展のにぎわい

民具

民具とは、私達働く庶民が日常生活するに用いられた道具であり、現在、民俗資料、生活文化財といわれている。これらの道具は、私達の先祖が数万年前より生活の道具として、能率的、機能的に知恵をしばりながら改良され、使用されて来たのである。これらの民具は、芸術文化財とちがって骨董的価値はなく、現代の文化、化学の発達により道具は人の力で動くのでなく電気、原子、石油のエネルギー革命によって、先祖から受け継がれ使われてきた道具の大部分は利用価値がなくなり、ほとんど失なわれてゆくのである。

そこで我町では、昭和四十九年一月二十日より二十四日迄『矢吹町くらしの歴史展』を開催、これらの失なわれゆく民具を一堂に集め、町民の方々にもう一度私達と一緒に、厳しい生活を闘い抜いて来た民具のたくましい姿を見ながら、昔話となつてしまった使用法など尽きることなく、日本の風土に合った「生活のしかた」について教えられ、反省させられたのである。

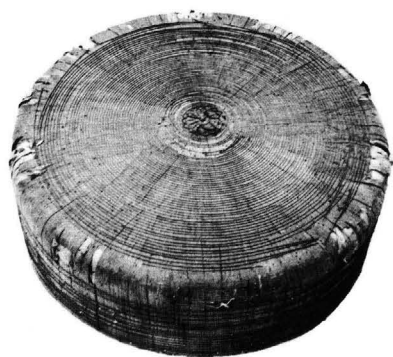
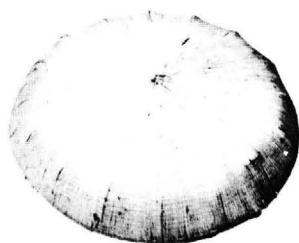
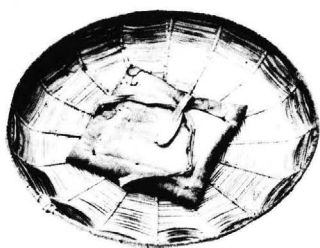


昭和49年 1月20日 「くらしの歴史展」の会場の一部



昭和49年 1月20日 「くらしの歴史展」 展示風景

笠
道中用笠・陣笠





三城目 伊藤宅



寺内 高久宅



中畑 岡崎宅



矢吹 会田宅



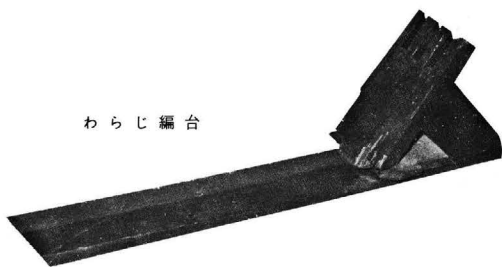
明新 円谷宅

はきもの

わらのはきもの

今から十年位前迄は、農村の履物の主なものは稲の藁を材料としたわらじ、ぞうり、あしなが、わらぐつ等で、農作業には欠かせないものであった。又農作業の主動力であった馬や牛にも、足の保護の為に履かせて作業をさせた。これらの履物は、冬の農閑期に自家消費を原則として一年間の量を製作し、技術も親から子へ、子から孫へと伝えられてきたが、今は製作されず忘れ去られようとしている。

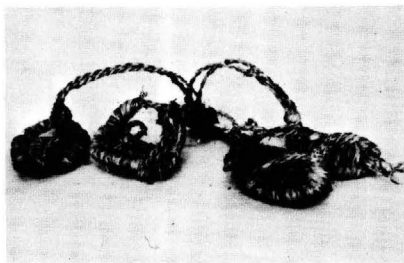
わらじ 編台



うすぐつ



あしなが



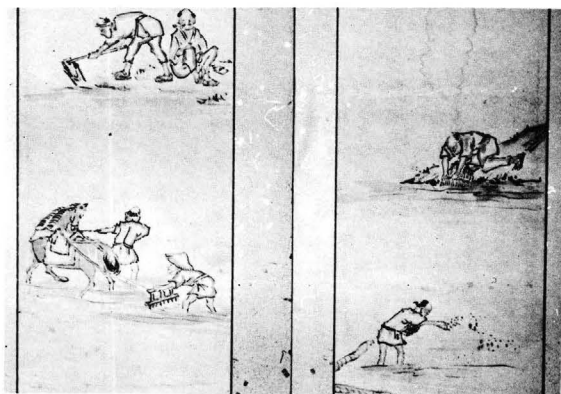
(左) 牛用 (右) 馬用



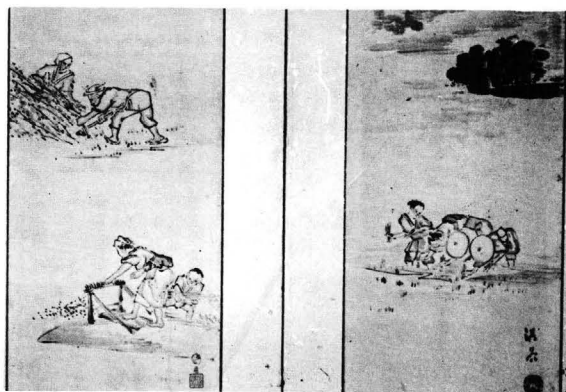
わらぐつ

耕作図屏風

この屏風に描かれている絵は、明治・大正時代の稲作風俗を描いた貴重な絵である。
(作者は泉崎出身の大原淇谷)

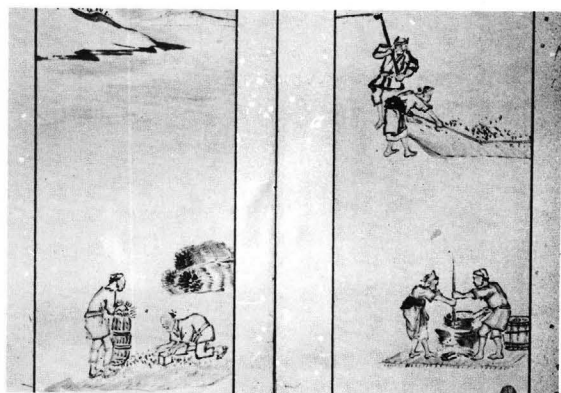


左 ①田うない ②種刈ひやし
③代かき ④種まき



右 田 植

① 稲刈
② 稲こき(せんばこき)



左 依詰め
① くるり打ち
右 ② するす(土するす)

農具 (一)

現在の農具は、機械化され動力化されてきたが、数年前迄は、弥生時代に米作りが発達し、それにともない道具が作られ、堅い土を耕すには木の「くわ」では直ぐにこわれてしまうので工夫され、先に金属の刃をつけられる様になり、その土地に適した形に機械的に改良されながら、数千年もの間同じ様な形で使用されてきたのである。

鍬 (畑などを耕す農器具)



備中鍬 (万能)

(荒地や乾田地などを起こす農器具)



三本鍬 (湿地地などを起こす農器具)

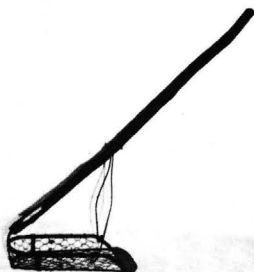


鋤 (土を掘って牛蒡や薯蕷芋等を掘り取る農器具)



じよりん

(麦・小麦などの青く芽が伸びたころに麦の中に土を散らして入れる根の安定をよくする農器具)



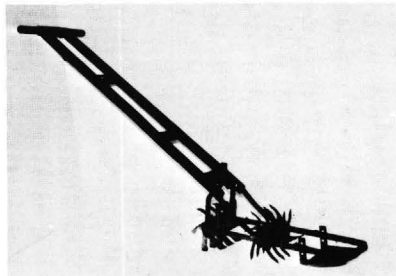
農具(二)

田打車

苗を植えた田の中の土をやわらかにして、苗の発育をよくする農具



二段式田打車(昭和)



千歯こき
(稲の穂先の糠をこきおろす器具)

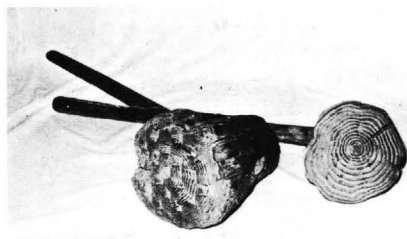
粃打(ぼっちゃらうち)

(稲の穂先のつながっている粗粃を落す器具)



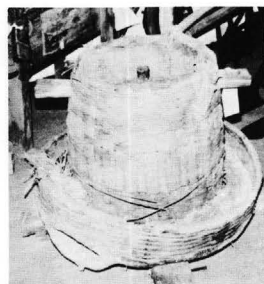
粃打(ぼっちゃらぶち)

(粃の連っているものを一粒になるよう打ち落すもの)



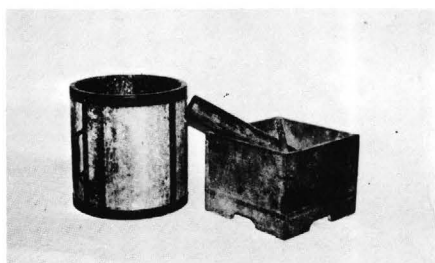
土するす

粃を摺って玄米にするため一部に棒をつける廻した摺摺器具



枡

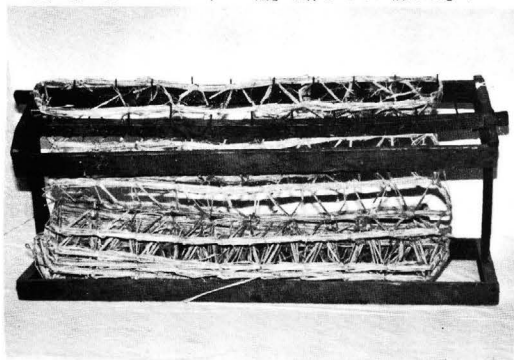
四角の枡は五升枡(約九リットル)円形の枡は一斗枡(約一八リットル)米・麦その他雑穀を計る器。円筒形の枡は「とかき」枡のふちと平にならずもの



養
蚕

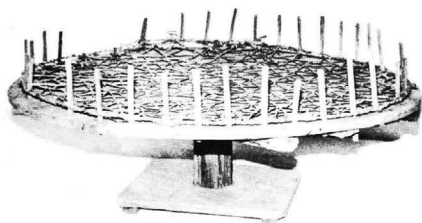
まぶし編機（明治時代）

蚕が葉で編んだわくの中に「繭」を作るために編んだもの

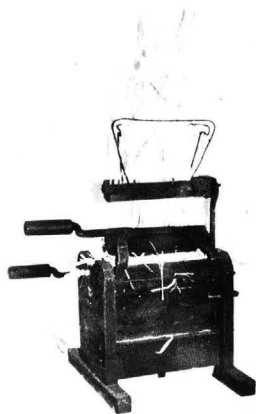


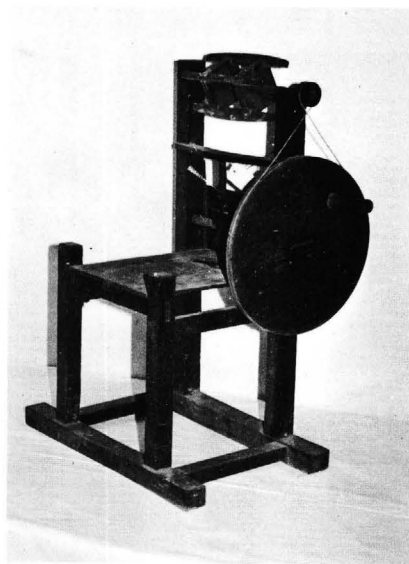
五穀豊稔を祈る養蚕神社の神像掛軸

こした網と蚕のかすを取り除く網を作る器具
（明治時代）

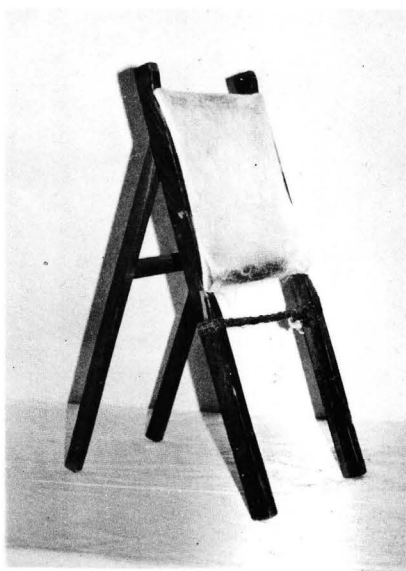


まぶし編機（大正時代）

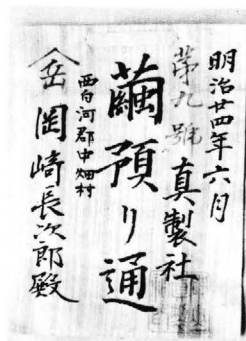




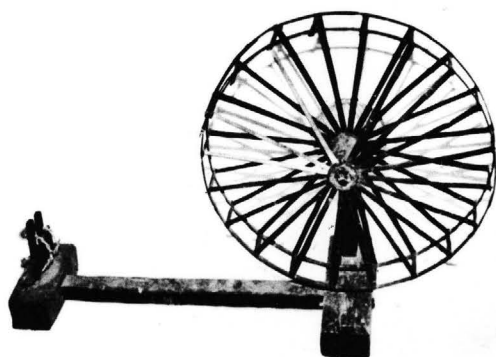
座ぐり(わくいと)
(糸わくに糸をまく器具)



まわたかけ
(繭をはごしてまわたを作るもの)



繭通帳



糸車 (糸線車)
(まゆ, 綿などから糸をつむぎだし, また, 糸をよりあわせる道具)

交易用具

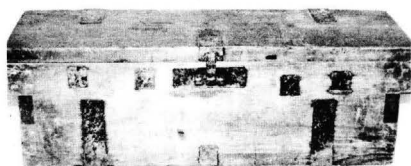
昔の生産は自家消費が目的であったが、余った生産物は物々交換しあうようになり、物を「はかる」のには目分量ですませることも出来たが、租税を納めるようになってから正確な規準の度・量・衡の器具が定められ、売買・取引のもつとも重要な用具となり、時代によっていろいろ移り変り、現在は尺貫法からメートル法に大きく改められたので、写真にあるような用具は店頭や取引の場から姿を消した。



銭 樽 (ぜにたる)



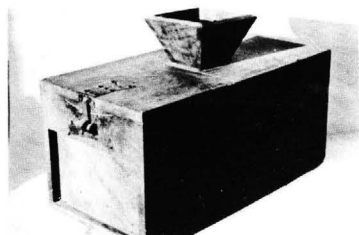
銭 さ し



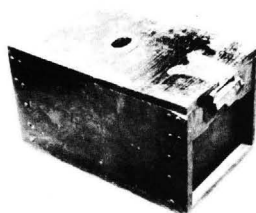
千 両 箱



そ ろ ば ん



き っ っ (枡付) (銭箱)



き っ っ

定 貸賣一切
御断申上
明治三十四年十月一日
西滑郡酒造組合

貸売断り広告

釀賣
一上古酒一升金三十三圓
一中古酒一升金廿七圓
小賣
一上古酒一升金三十三圓
一中古酒一升金三十圓
但銘酒は限り
無
外ニ樽代時價申上
右ニ通決定也
明治三十四年十月一日
西滑郡酒造組合

定 価 表



とっくりと酒樽

手仕事



い か け



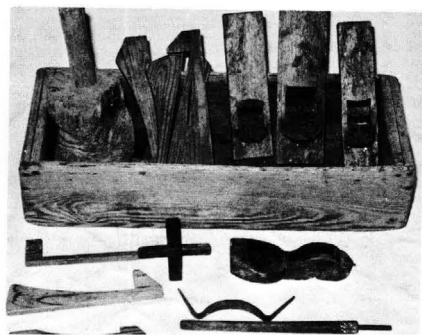
た た み



か こ



しめなわ



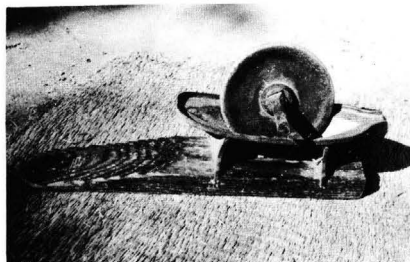
桶造り道具



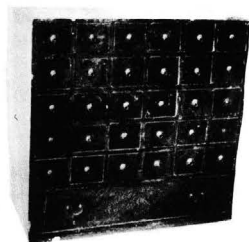
まこも

薬

昔の薬は漢方系が多く、薬名も三字か五字にして四字にすることを忌むならわしであった。
これらの薬は、地方の旧家や寺などで家伝薬として、製法や薬草名などは秘伝とし一家一薬の調剤法で作られ民間に配られた。



やげん



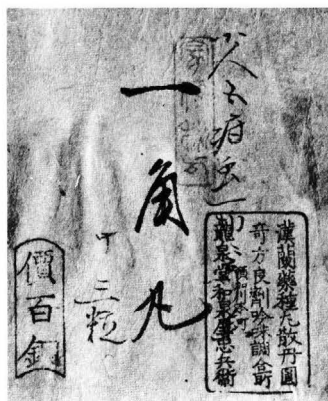
薬たんす



目薬広告版木



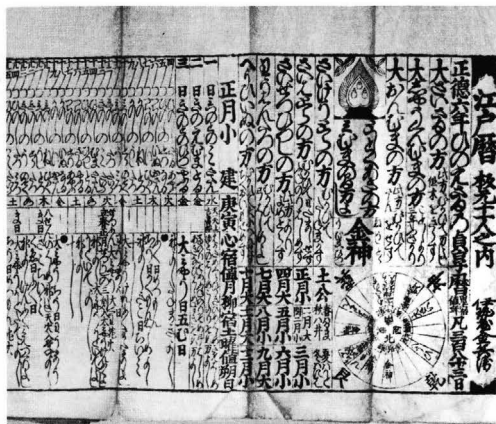
目薬看板



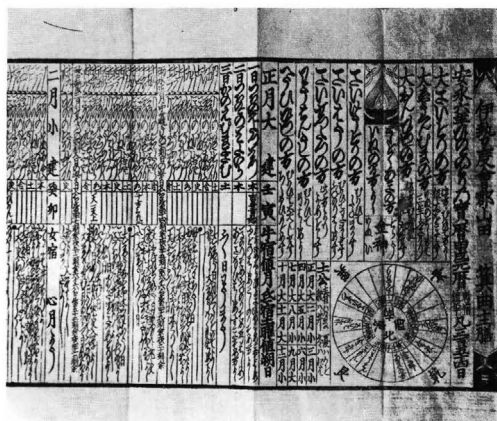
薬袋

曆

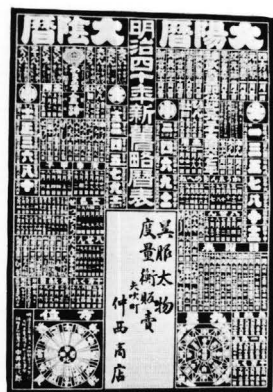
曆は明治五年に大陰曆から太陽曆に改正されたが、大陰曆（旧曆）がないと生活や農作業に不便なため、改正後の曆には新、旧両方が印刷されくばられた。



江戸曆 正徳6年(享保元年 1716)



伊勢曆 安永6年(1777)



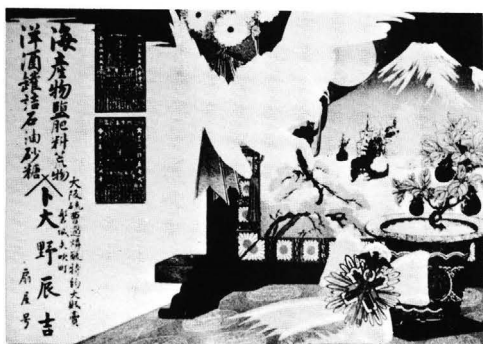
略曆 明治40年(1907)



会津曆

絵紙

絵紙は、江戸時代後期より商店が新年の景品としてお客に配り始め、明治時代に入って印刷技術の発達にともない大量生産が出来る様になってから、各商店競って絵柄を選び、略暦や汽車時間表を入れて正月初売の景品にした。これらの絵紙から明治時代の風俗をうかがうことが出来る。





交通 (一)

道標・常夜燈

道しるべは、昔も今も道路交通上欠くことのできないもので、形こそ変ったが主要道路の交差点に立てられているが、昔の道標には、道案内と交通安全を願う仏像などが一緒に石材に彫刻されて立てられていた。

明治以後交通機関の発達にともない、道路も人や馬の道より自動車の道になり、道幅も拡張される様になり、道端の道しるべや常夜燈は移転されたり、こわされたりして現在ではわずかしか残っていない。



常夜燈 (新田)文化8年



石仏に印された道しるべ (須乗)天保10年



道しるべ (神田)安永7年

交通 (二)

隈戸川橋仮橋用材

奥州街道、大和久地内を流れる隈戸川は、洪水になると氾濫し橋を流し道路を不通にしてしまうので、災害復旧用材として山王寺境内に保管していたが、現在は永久橋になって仮橋の役目は終ったが、交通資料として貴重なものである。



関所手形 慶応4年

これは慶応4年(1868)辰2月の関所往来手形にして関所又は御番所の通行の砌りこれを示して通過したものである。鑑札は板であるが往来手形は紙を使用した。



仮橋用材 (大和久)



三城目鎌倉会の獅子舞 (昭和45年)



三城目宿を通る獅子舞, 平鍬踊り行列
(昭和17年)



三神地区郷土盆踊りの景 (昭和45年)



三城目鎌倉会の平鍬踊 (昭和45年)



原宿の二十三夜講 その(2)
つつみをたたいて歌をうたいながら舞う景。



原宿の二十三夜講 その(1)
月の23日(旧)講員集り, ご飯など食べて月の
出を待つ月待行事の景。

石
仏



三十三観音磨崖仏(1) (矢吹)



庚申塔 (中畑新田)



三十三観音磨崖仏(2)



下の地藏 (矢吹)

六地藏と如意輪観音 (田内)





仁王像(うん) (明新) その(2)



仁王像(あ) (明新) その(1)

不動明王 (神田)



地藏尊 (須乗)



大黒天 (神田)

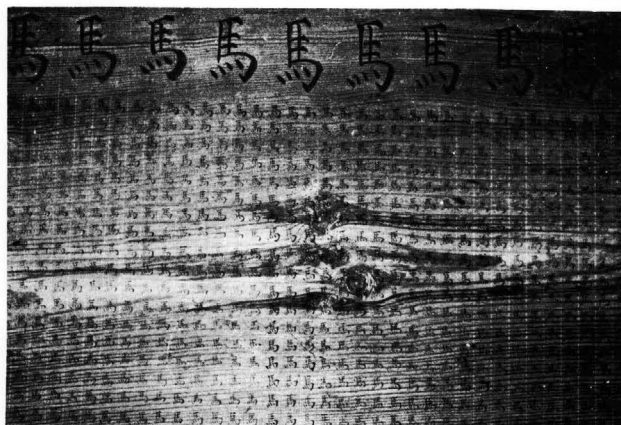


馬の信仰

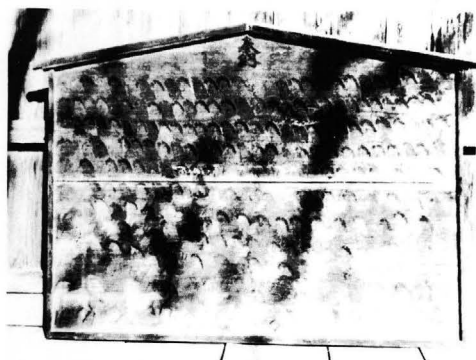
人と馬のかかわりは古くからあり、家畜として同じ家の中で飼われて来た。又馬を神の使いとして供えた。最初は生きた馬を神社に奉納したが、中世の頃から木彫の馬を、又その後は板に馬の絵をかけた絵馬が奉納される様になって、現在も続いている。矢吹地方は、馬産地として盛んであった関係上馬の信仰が残っている。



木馬 (明新)



文字絵馬 (明新)



絵馬 (明新)

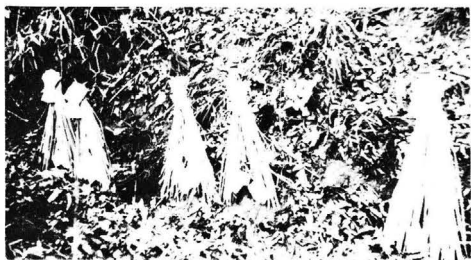


馬頭観音への供えもの (原宿)
10月1日の祭礼

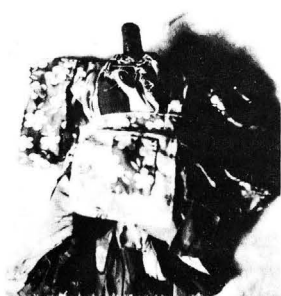
民間信仰

日本人には祖霊観とか来世観などという考え方が古くからあり、これらのものの考え方が信仰の基本的なものとなり、部落産土神（うぶすな）氏神信仰となつて、信仰の場として木造又は石造の祠殿が建られた。その氏神や産土神に祈願して、人間が悪霊にたたれないようにした。または願望成就のために神仏の力にすがり願いをかけ形で現わしたが、現在祠殿に残されている絵馬やミニチュア化された各種の農具やその他の奉納物である。

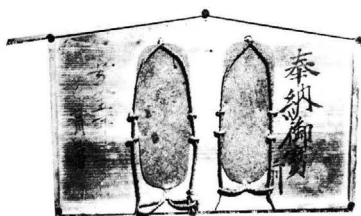
大 日 堂（原宿）



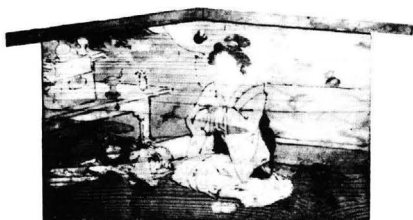
わらほうでん（寺内）



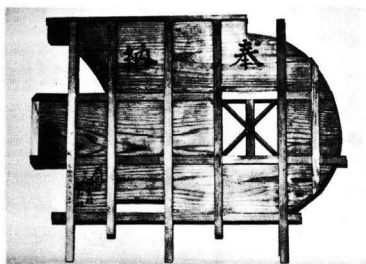
おしんめい様（神田）



金わらじの絵馬 中畑 根津権現



小 絵 馬 中畑 根津権現社



とうみ
唐笑の絵馬



小 絵 馬 中畑 根津権現社

